

ピエール・ルルー

——復古王政，七月王政下の一思想家像——

清 家 浩

1789年のフランス大革命から1848年の2月革命に至る道筋は、王権と民衆の格闘，その間に着々と地歩を固めるブルジョワジー，といった大雑把な図式を浮かびあがらせる。革命初期の立憲君主制的統治から，第一共和制，恐怖政治，ナポレオンの君臨，ブルボン家による復古王政，ルイ・フィリップによるブルジョワ王政，そして，2月革命までの相次ぐ革命と反動，民主主義と独裁の歴史的評価はさておき，旧体制が打倒され，ひとたび革命が果たされた時，社会を，世界を，どう再編成するかという課題が，当然，課せられたはずである。それは単に，統治あるいは理念の問題に留まらず，産業革命の進展，階級分化という社会経済上の現実の要因もからめて，フランス社会主義と称される思潮の核となる問題意識でもあったはずである。

ところで，大革命を準備するものとしての18世紀啓蒙思想の研究に比べて，1848年に向う思想の潮流は，サン＝シモン，フーリエの空想社会主義を除けば，十分紹介されてこなかったというのが実情のようである。『近代フランス社会思想史』のあとがきにはこう記されている。「ラムネーのキリスト教的封建的ロマン主義とブルードンのブルジョワ的無政府主義との間をただようサン＝シモン主義者ピエール・ルルーやフーリエ主義者ヴィクトル・コンシデラン，サン＝シモン主義からフーリエ主義に移行したコンスタン・ペクールはさておいても，ジャコバン民主主義の伝統にたつ共産主義者ラポンヌレー，ラオチエール，ピヨーなど，はたまた，ブラン

キとともに19世紀フランスの唯物論的共産主義の代表者であるデザミといったような、フランス労働運動の指導的な思想家は、われわれの国ではその名前さえ知られていない。云々⁽¹⁾】。

本論は、以上のような19世紀フランス社会思想のその後の研究の動向を跡づけようとするものではなく、ピエール・ルルーという一人物の肖像を描くことのみを目的とするのだが、大枠として、以上の背景を考慮しておかねばならないであろう。

従来、ピエール・ルルーが語られるのは、多く、社会思想的には、サン＝シモニズムとの関連からであり、文学の分野では、ジョルジュ・サンドの思想形成を通してのみと言ってよいであろう。つまり、付随的な扱いしか受けてこなかったのであり、50年代の状況が改善された形跡はない。フランス本国においても、近年再評価のきざしはあるが、アラン・ドゥコーの、「曖昧模糊とした理論家だが当時はひどく幅を利かせていたピエール・ルルー⁽²⁾」といった評言に端的に見られるように、事情はさしてかわらなかったのではないかと思われるのである。

ところで、ルルーの肖像といっても、新しい材料を手に入れたわけではない。最新の文献を読みこなしの上でのルルー論でもなく、特別な問題設定をしたわけでもない。ただ、新しいアプローチを試みる前に、ルルーに関する既知事項を整理しておこうと思うのである。

I ルルーの生涯

不確かな青年期 ピエール・ルルー Pierre Leroux は、1797年パリに生まれた。ラカサーニュの年譜によれば、⁽³⁾ 4月6日のことである。パリ9区

(1) ガローディ『近代フランス社会思想史』（1949）、中田清明訳、ミネルヴァ書房、1958。

(2) アラン・ドゥコー『フランス女性の歴史』（1972）、山方達雄訳、第四巻、1981、p. 228。

(3) *La Grève de Samarez*, édition établie par Jean-Pierre LACASSAGNE, Klincksieck, 1979, 2 vol. Tome I, p. 1. (以下、ラカサーニュと呼ぶ)。

にある彼の胸像の台石には4月17日生まれと刻んであるそうだが⁽⁴⁾。『空間のコスモロジー』が、1797年ブルターニュ地方ベルシーに生まれた、としているのは明らかに著者の勘違いである⁽⁵⁾。ラカサーニュによると、1808年10月、リモナディエ（ソーダ水販売業）の父が死去し、一家の生活はますます苦しくなるが、ピエールはパリ市の奨学金を得てレンヌ Renne のリセに通う（1809～1814）。ここで、年譜に2年の空白があつて、1816年、幾つかの印刷所（エラン Herhan, デイド Didot, セロー Cellot）で植字工、職工長を努める。が、リセを出た後2年間、彼は何をしていたのだろう。「労働者の子に生まれ、父の死後、学校を退いて石工として働いた⁽⁶⁾」。「秀才の集まる理工科大学^{エコール・ポリテクニク}に入学したが、経済的理由でこれを放棄、石工、植字工を経て『ル・グローブ』紙の編集に協力するようになった⁽⁷⁾」。父の死後にピエールはリセに入学したのであるから前者は記述そのものが誤りである。植字工の前、彼は、石工をやったのか。事実是否である。確かに彼は maçon になった。が、maçon=石工でなく、maçon=フリー・メーソン、秘密結社員となったのである。《Pierre Leroux avait fait partie de la charbonnerie vers 1820…》（ラカサーニュ）、《Dès 1821 il fait partie de la charbonnerie …》⁽⁸⁾（Dictionnaire des philosophes, PUF, 1984）。プチ・ロベール、ボルダス、『フランス文学辞典』の記述中の maçon が意味するのはこのことである。それでは、理工科大学はどうか。ガローデ

(4) 村松嘉津『続巴里文学散歩』、白水社、1959、p. 295。

(5) 篠田浩一郎『空間のコスモロジー』（第七章、象徴とインド思想——ピエール・ルルー）、岩波書店、1981、p. 168。この個所のルルーの経歴はプチ・ロベール2に依拠したものだが [Leroux (Pierre), Philosophe, publiciste et homme politique français (Bercy, 1797—Paris, 1871)…] Bercy は、現パリ市の Bercy であろう。又、同辞典のフランス帰国の年号の誤記（69年、正しくは59年）も又、そのまま踏襲されている。

(6) フランク・E・マニュエル「サン＝シモンの新世界」（1956）、森博訳、恒星社厚生閣、1975、p. 38。訳者による人名解説。

(7) 『空間のコスモロジー』、p. 168。

(8) Charbonnerie. 炭焼き党。イタリア、フランスでおこった革命的秘密結社。フランスでは7月革命の一翼になったのち解体。1820年末の時点で8万人の加盟者を擁していた。

⁽⁹⁾と、PUFの哲学辞典は、(1814年)理工科大学へ入ろうとしたのだけれど、生活の資をかせぐために受験を断念したという書き方である。最も信用の置けそうなラカサーニュはすでに見たように空白である。同書のビブリオグラフィーに掲げているP. F. トマの『ピエール・ルルー。生涯と作品と教義。19世紀思想史への貢献』(Pierre Félix Thomas: *Pierre Leroux. Sa vie, son œuvre, sa doctrine, contribution à l'histoire des idées du 19^e siècle*. Paris: Alcan, 1904)に、ラカサーニュが、年譜は不正確と注記している(p. 53)ところからみて、彼は、推測はさげ、不明な所は不明なまま空白にしたのだと解釈される。周知の通りルルーはサン＝シモニズムの洗礼を受けるわけだが、この学派の指導者に理工科大学出身者が多かったこと、最初の頃の入信者は理工科大学の学生だった事情から、ルルーと理工科大学が確たる証拠なしに結びつけられたと推測される。あるいは、進学の意志はあったかもしれないが。とにかく、彼は、ジャーナリストになる前、植字工で身を立て、4人兄弟の長男として家族を養っていたことは確かである。1817年には新しい印刷術を創案し、翌年1月25日には実用化の試みのために不動産を売ったりもしているが、資金の手当てができず計画は挫折する(ラカサーニュの年譜による)。そして、1821年、子供の教育のために借金を重ね辛酸をなめた母がこの世を去る。

ジュルナリスト ところで、進歩思想に貢献する新聞発刊の構想が1817年のイギリス旅行の際に生まれる。貧困故に学業を断念した若者が隣国の進歩的政体に触れ、社会改革の使命を感じたのである。この夢は、熱烈な炭焼党員を経た後、1824年、『地球』*le globe* 紙の創刊(9月15日)によつ

(9) 前掲書 p. 195.

(10) ガローディ、前掲書 p. 188、及び、セバスティアン・シャルレティ『サン＝シモン主義の歴史』(1931)、沢崎浩平、小杉隆芳訳、法政大学出版局、1986、pp. 53～54。「理工科大学はこれらの思想が社会に広まる水路になる必要がある」(アンファンタン)。

(11) 「寄稿家としては、凡そ當代新鋭の詩文人思想家をことごとく網羅していたから、非常な成功を見、国内のみならず欧州諸外国に広く講読された。……創刊号以来、反動的な王制復古時代にあつて、芸術、宗教、政治の自由主義を鼓吹してやまなかつた」。『続巴里文学散歩』p. 295.

て現実のものとなる。この企ては、ルルーにとって、一個の転回点となる。と言うのは、植字工から自ら筆を執って自論を述べるところのジャーナリストへの転換がなされるのであり、文芸評論家、社会思想家、哲学者、政治家としてのキャリアの出発点がここにあるからである。同時に、文学者達、サン＝シモニストとの交流が果たされるのも同紙の編集を通してであった。年譜その他からは、ルルーの役割はそれほど鮮明に浮かびあがってこないが、当初は、リセ以来の級友デュボワ Dubois（師範大学を出て当時リセ・シャルルマーニュの教授）が編集を引き受け、ルルーは、編集も行いつつ、自己の技能を生かして、印刷等技術面を分担したのではなかろうか。⁽¹²⁾ いづれにせよ、彼自身の最初の署名記事が掲載されるのは1827年11月24日号（『ヨーロッパ連合論』*De l'Union Européenne*）である。⁽¹³⁾ その後も、政治から文学までの論説を執筆しつつ同紙の中心を成し、30年には *gérant*（発行責任者）となる。この間、ルルーは当時まだ医学生生の寄稿家サント＝ブーヴ *Sainte-Beuve* と親しくなり、かつては彼の詩を活字に組むだけだったユゴー *Hugo* ともしばしば顔を合わせることになる。25年には、デュボワと共にサン＝シモン *Saint-Simon* その人と会見する。⁽¹⁴⁾ 他方、24年から29年にかけてパリの政治宴会に参加している。⁽¹⁵⁾

1830年10月、『地球』はアンファンタン *Enfantin* に売却され、サン＝シモニズムの機関紙となる。7月革命を境にした経営危機（仲間が新政府に地位を求めて同紙を棄てた）乗り切りの意味もあったが、事実上の責任者であったルルーにサン＝シモニズム受け入れの下地が十分あったことも原因である。サント＝ブーヴと共同で執筆した『無能な自由主義との訣別』

(12) David Owen Evans, *le socialisme romantique*, Librairie Marcel Rivière et Cie, 1948, p. 33（以下、エヴァンスと呼ぶ）。

(13) *Ibid*, *Bibliographie*. p. 240. ルルーの作品の克明なリスト参照。

(14) サン＝シモンは自分の定期刊行物以外に教義の普及の機関を求めてパリの様々な新聞社と交渉した。『ル・グロープ』紙との交渉は合意に至らなかったが、ルルーは、彼に好意的であった。『サン＝シモンの新世界下』p. 578.

(15) ラカサーニュ年譜, 《1824-1829, Pierre Leroux anime les banquets démocratiques des Bretons de Paris.》

Plus de libéralisme impuissant (1831年1月18日)は、サン＝シモニスムへの信仰告白の性格を持つ。同時に、この年の2月から6月にかけて、ルルーは、サン＝シモン教会の使節として、教義の普及のためブリュッセル、リエージュ、リヨン、グルノーブルを歴訪し、さらに、パリでは、9区の労働者教育にあたっている。⁽¹⁶⁾が、11月には、アンファンタンへの反発から、サン＝シモン派と手を切り、ルルーの執筆活動は、『百科評論』誌 *Revue encyclopédique* へと移る。1819年以來の自由主義の雑誌は、カルノ Carnot とルルーに代表されるサン＝シモン教会離反グループの機関誌になるのである (1831～1835)⁽¹⁷⁾。一方、レノー Reynaud と共に、「19世紀における人類の知識の一覧表を提供する、哲学、科学、文学、産業辞典」たる『新百科辞典』*Encyclopédie nouvelle* 8巻 (1833～1841)⁽¹⁸⁾の刊行に着手し、95の項目を執筆する。次いで、1841年11月1日には、ジョルジュ・サンド Georges Sand、ルイ・ヴィヤルドー Louis Viardot と共に起こした雑誌『独立評論』*Revue indépendante* 第一号が刊行される。⁽¹⁹⁾が、翌年12月、当誌の実権はルイ・ブラン Louis Blanc の手に渡り、43年1月23日以後、ルルーとの縁は切れる。この年、免許を得て (12月22日) ブサック Boussac に印刷所を開き、45年には、サンドの援助を得て、『社会評論、あるいは、プロレタリア問題の平和的解決』*Revue sociale, ou Solution pacifique du problème du prolétariat* を発刊する。又、サンドが44年に始めた『アンドルの斥候』*l'Éclaircur de l'Indre* 誌の印刷も、45年夏からはブサックのルルー印刷所で行われることになる。と同時に、ルルーの作品の再版も盛んに行われる。このブサック時代は、文学評論から政治・経済論文に至るまで、

(16) エヴァンス, p. 34.

(17) Paul Bénichou, *Le temps des prophètes*, Gallimard, 1977, p. 333. (以下、ベニシューと呼ぶ)。

(18) 第2巻までのタイトルは、*Eccyclopédie pittoresque à deux sous* である。

(19) ルルーとサンドは、サント＝ブーヴの紹介で、1835年6月17日に知り合う。以後、サンドは熱烈なルルー賛美者となり、金銭的援助を惜しまない。なお、『独立評論』刊行のいきさつは、エヴァンス p. 116 以下参照のこと。

今まで、ジャーナリズムを通じて発表した彼の思想のまとめの時期といった趣きを呈するのである。

2月革命以後 サン＝シモン派と袂を分って以来共和派に接近していた⁽²⁰⁾ピエール・ルルーは、48年2月革命に際して、共和制を主張する。そして、2月27日には、ブサックの首長に選出される。さらに、同年、憲法制定議会の議員に選出されるのだが、ラカサーニュによると、総選挙(4月23日)では、リモージュとパリで立候補して落選したことになっていて、国会議員になるのは、セヌ県での補欠選挙(6月4日)によってである(この補選では、彼と共に、ルイ＝ナポレオン・ボナパルト Louis=Napoléon Bonaparte, ヴィクトル・ユゴー, チェール Thiers, プルードン Proudhon が選出されている⁽²¹⁾)。翌年5月17日再選され立法議会議員となる。

この間、1851年12月2日、ルイ＝ナポレオンのクーデタまで、ブサックとパリ(サンドレ Sandré 社)で、彼の作品が続々と再刊される一方、ルルーは、自己の政治信条を、主として自ら経営者兼執筆者である日刊紙『真正共和制』*La vraie République* に、発表するのである。50年には、サンドレ社から、1825年から50年までのルルーの作品を収めた全集が刊行される(もともと、各巻700頁8巻本の予定は、政変のあおりで、2巻までしか出なかった)。

クーデタによるルイ＝ナポレオンの権力掌握と同時に、ルルーは、苦難に満ちた亡命生活に入る。サン＝シモンヤンの銀行家ペレール Péréire 兄弟、サンド、ダグー d'Agoult 夫人の協力でロンドンに渡った彼は、同じく亡命中のルイ・ブラン、カベ Cabet 等と共に、社会主義の雑誌を興そうと企てるがうまくいかず⁽²²⁾、1852年8月、一族と共に(総勢27名)、ジャージー Jersey 島へ移り住み、サマレス Samarez で農耕を営む(1853年、『ジ

(20) 1833年、レノーと共に、『人権協会共和派原理』*Principes républicains de la société des Droits de l'homme et du Citoyen* を発表している(ラカサーニュ年譜)。

(21) Maurice Agulhon, *Les quarante-huitards*, Gallimard/Julliard, 1975, p. 20. ラカサーニュの日付6月8日は誤りである。

(22) エヴァンス, pp. 48~49.

ヤージーの現状に寄せて。当地の農業生産を、それ以上とはゆかずとも、5倍に増やす方法について』*Aux états de Jersey. Sur le moyen de quintupler, pour ne pas dire plus, la production agricole du pays.* 発表)。1858年5月から59年4月まで、哲学、政治、文学を扱った雑誌、『希望』*L'Espérance* を刊行。1859年の大赦の後帰国したルルーは、60年から71年まで、各地を転々としている（パリ、ヴェルサイユ、サン＝ラファエル、グラス、ジュネーヴ、ローザンヌ、シュトゥットガルト、ナント、パリ）。この間、哲学詩『サマレスの浜辺』*La Grève de Samarez* (1863～65)⁽²³⁾、ヘブライ語からの翻訳による五幕の哲学劇と銘打った『ヨブ記』*Job* (66) 刊行以外に見るべき活動はなく、1871年4月12日、途中で生涯の幕を閉じるのである。14日の葬儀には、神秘学派の使徒たる一哲学者としてでなく、「1848年6月蜂起の直後、勇敢に敗北者の弁護をひきうけた一政治家として」⁽²⁴⁾のルルーに敬意を表して、コミューン政府は、ヴァレス Vallès を含む2名の代表を送った。

II ルルーの思想

全集 ルルーの著書、論説のタイトルにざっと目を通せばわかることだが、彼の扱った範囲は広い。論の性格上、多岐にわたる彼の思想を網羅的に跡づけることはできないし、その準備もない、と断った上で、まずは、便宜的に、1850年の彼の全集のオーギュスト・デムラン Auguste Desmoulins によるプロスペクチュス（出版案内）、及び、著者自身の緒言を読んで、⁽²⁵⁾ 全体の見通しを立てておこう。

思想家ルルーの25年間の思索の成果として集大成された作品群 *écrits* には、デムランによると、「それらを着想した思想の深い統一性」が働いて

(23) 1858年から59年『希望』に発表されたものが母体であり、ラカサーニュの校訂版に両者の対応が表示されている (pp. 18～19)。

(24) ガローディ, p. 202.

(25) *Œuvres de Pierre Leroux*, Slatkine Reprints, Genève, 1978. Prospectus pp. 1～4, Avertissement pp. V～XIII.

いる。言いかえると、一個の体系 *systeme*, 又、「生の一般法則の発見」がある。著者自身に言わせると、「私の様々な作品は相互に説明しあうものであり、互いが互いの証拠となり証明の役を果たす。すべてが、実際、序と展開部と結論を持った一個の同一の作品なのである (*«Tous sont, à vrai dire, un seul et même ouvrage, qui a son commencement, son milieu et sa conclusion.»*)」[多岐性と統一性]。

又、この書物が書き継がれたのは、「フランス大革命の発展の只中、この革命を社会の真の組織化へ到達せしめようという不断の目的」をもってなのである、とデムランは紹介する。そして、ルルーは、先行する知性に負うところが大きいこと、又、後生に対する自己の貢献を述べる[過去(革命)の継承発展]。

一方、著者は宣言する。「私は著述家 *auteur* ではない、信仰者 *croyant* である」と。彼のこの信仰の対象は人類全体 *Humanité* であるが、「私は、この信仰を理解し、愛し、それに仕えたことを幸福に思い、この信仰を理解し、愛し、それに仕えることを私に許した神への感謝にあふれつつ、私の母なる人類 *Humanité* が私に与えたものを、今、人類全体に返すことしかしないのである」[信仰、そして、ユマニテ]。

それから、デムランは、ルルーのソシアリズム *socialisme*⁽²⁶⁾ の定義を引用する。即ち、「科学の観点からすれば、それは、引力 *Attraction* の名で知られた一般法則であり、モラルの観点からすれば、それは、協同 *Association* であり、実践的観点からすれば、それは、最も多数を占める階級の運命の物質的、精神的、知的改善 (*Amélioration matérielle, morale et intellectuelle du sort de la classe la plus nombreuse*) ということである」。又、緒言の最後で、ルルーは、当全集に与えるべき題辞、彼の思想を要約する3語を与えている。ソリダリテ *SOLIDARITE*, トリヤード *TRIADÉ*,

(26) *Socialisme* を造語したのはルルーである。一部の辞典に残るレーボー *Reybaud* 説はエヴァンスによって明確に否定されている。前掲書 p. 223 *Note sur le mot socialisme* 参照。

シルキュリュス CIRCULUS。ルルーが、「理解されることなく受け入れられている」と語るソリダリテの本質は、『哲学者辞典』（PUF）の説明を参考にすると、個人と人類と神の相互関係を自覚し、ただ単に神にのみ向けられたキリスト教の愛を乗り越えるところに存する。トリヤードは、人間とは、「感覚、感情、知が不可分に一体をなす」ものであるとする類の説であり、現実—理想—進歩の組合わせになったり、要するに、不可分の三体による構成を指す一般原理である。シルキュリュスは、元々、円環であり、又、誕生から死に至るまでの人間の営みの総体を指す（『20世紀ラールス』）が、ルルーのそれは、特に、食物摂取と排泄を基にした自然の循環である。

[思想の根本原理]

さて、それでは、次に、時代との関連と共に、ルルーの思想の成り立ちをより具体的に見ることにしよう。

芸術論 エヴァンスは、ロマン派大作家達と社会運動に関するハント H. J. Hunt の研究から次の二つの事実を引き出している。(1)社会に奉仕する芸術 (l'art pour la société) の教説がこれほど喧伝された時代はなかった。(2)ロマン主義と社会主義が合体して現われている⁽²⁷⁾。確かに、ルネ以来の、絶望して社会に反抗し孤独な夢想にふけるロマン派の人物像があるにしても、ロマン派作家そのものは、深く社会にアンガジェしているのである。ラマルチーヌ Lamartine、ユゴー、ヴィニー Vigny、サンド等々の名前を思い出すだけで良い。彼らは、言ってみれば、古典主義の土壌であった旧体制にかわる彼らの世界の構築に責任をもったと言えるのではなからうか。その意味で、彼らは大革命を、そしてルソー Rousseau を継承しているのであり、ルルーと同じ陣営に属し、その結果、両者の思想と行動は互いに共鳴しあうことになるのである。ラマルチーヌは言っている。「いつの日か、人は、『社会契約論』を読むように、ルルーを読むだろう⁽²⁸⁾」。いづれにせよ、ロマン派の時代には、文学者の動向と社会改革の動きとは密接

(27) 前掲書 p. 195.

(28) Ibid, p. 38 の引用。

に絡みあっていることに留意しておこう。

では、ルルーは、芸術をどう考えたか。「作家は自己が生きた時代、及び、自己に先行しあるいは続くあらゆる伝統から孤立してはならない」(『折衷主義への反論』*Réfutation de l'Eclectisme*, 1839)⁽²⁹⁾。この意見は、続く、彼自身のウェルテル翻訳の再版に添えられた、『現代詩考察』*Considérations sur la poésie de notre époque* (1839)、で敷衍される。「芸術は自然の模写ではないし、芸術の再生産でもない。芸術は世代から世代へ生長していくものである。すべて時代から靈感を得た大芸術家の作品が継起する。そして、この連続こそが芸術の発展なのである」。「詩 *poésie* は18世紀及びフランス大革命から自ずと流れ出たものであり、それは、危機と変革の時期の最も精彩ある産物なのである」。かくして、「現代芸術の中に、社会の未来に関する見解の確証が、そして、社会の現状の中にはこの芸術そのものの説明が」⁽³⁰⁾同時的に見出されることになるのである。ルルーは、別に、芸術が社会に有用であれ、とは説いていないが、彼の説の当然の帰結として、芸術の自律はあり得ず、「芸術のための芸術」*l'art pour l'art* は否定される。そして、真の芸術は常に未来を告知するのであるから予言的 *prophétique* な性格を持つのである (《*Elle (la poésie) a toujours été prophétique.*》)。スタール夫人 *M^{me} de Staël* の『ドイツ論』*De l'Allemagne* を検証することから始めて、バイロン *Byron* の分析を挺子に、『ウェルテル』と現在のロマン派との脈絡をつけるルルーの筆致には文学のオピニオン・リーダーとしての風格がある。とは言え、彼が傑出した批評家であったのかどうか即座に言うことはできない。同時期に『グローブ』紙から批評家としてスタートしたサント＝ブーヴがサン＝シモニスムに背を向け、保守に回帰しつつ文学の資質を深めていった様を見れば、あるいは、ユゴーの大作家への足取りを見れば、サンドの思想上の教師であって『スピリディオン』*Spiridion* 執筆に手を貸したとか言っても、結局、文学の観点から見れば、創

(29) *Ibid.*, p. 15.

(30) *OEuvres*, vol. 1, p. 436.

造性は持ちあわせていなかった。⁽³¹⁾ 文学者でなかったルルーをつかまえて、創造性の欠除を非難してもしようがないのだが、彼は、芸術をも、彼の進歩思想、連帯主義の一部分として位置づけようとしたのである（「芸術とは、我々にとって、人間認識の一領野でしかなく、より良い世界への不断の渴望であると同時に、様々な時代における生の表現である。それは、人類 l'Humanité の各時期の連続する予言の表明でしかない」⁽³²⁾）。

よく引き合いに出される彼の象徴理論も、『文体の詩について』 *De la poésie de style* (1829) で見る限り、純粹芸術の観点から語られるのではなく、サンボル *symbole* とか メタフォール *métaphore* の定義も曖昧そのものである。が、彼の象徴論の展開は他の作品にまたがるものであり、仔細な検討は他の機会に譲ることにして、ベニシュエの見解のみを引用しておこう。「象徴あるいはコレスボンダンス 万物照応の詩学は、フランスでは、以前から流布していたのであり、1830年においては、それは、ほとんど常套句であった。ルルーの独創は、ただ単に、サン＝シモン主義社会学によって再編された文脈にそれを招き入れ、それによって、詩人の精神的権威を思想の流派に拡大していった点にのみ存する」⁽³³⁾。

サン＝シモン主義 ルルーが活発にサン＝シモン主義普及の活動をするのは、表向き、1830年から31年のことであり、アンファンタンと対立したバザール *Bazard* を支持して、グループを離れたのであった。ところで、1820年（あるいは21年）ルルーが参加したフランス・カルボナリ党の創立者の一人がバザールだった点に注目すると、ルルーは、バザールと行動を共にし、彼から多くを得たのではないかと推測される。⁽³⁴⁾ 又、バザールと共

(31) ドイツの詩人ハイネは、サンドへのルルーの影響を嘆いている。「彼は、サンドを、生き生きした精彩ある形姿の創造という健康な喜びに身を任させるかわりに、不毛な抽象の方へ入りこませる……」。エヴァンス p. 115 の引用。それに、ルルーは、サンドにとって全能であったわけではなく、彼女が影響を受けた多くの人物のうち一人にすぎない。

(32) *Revue encyclopédique*, LX. ベニシュエによる引用。前掲書 p. 341.

(33) *Ibid.*, p. 340.

(34) バザールによって組織された、タランヌ街のサン＝シモン主義の連続講演（1829）をルルーも聞いたのではなからうか。

にカルボナリ党を創立したビュシェ Buchez は、運動解体の後フリー・メーソンを経由して、やがて、1825年5月に公開された『新キリスト教』*Nouveau Christianisme* を読んでサン＝シモン主義に帰依している⁽³⁵⁾。理想の社会建設を志向する精神が同じ軌跡を描いているという風に見える（ミッシェル・ド・ブルージュ Michel de Bourges の共和主義から、ルルー、ラムネー Laménais、サン＝シモニヤン達の社会主義に傾いていったサンドも軌を一にしている⁽³⁶⁾）。サン＝シモニズムに統合される一つの潮流の存在がここには見てとれるのである。そうした全体の流れにあつて、ルルーが、サン＝シモンあるいはバザール、アンファンタンのサン＝シモニズムから吸収したものは何であつたか、と言うと、それは先ず、何よりも、地上に万人の幸福をうち立てようとする願い、そのための公衆教育を考える百科全書派的姿勢である、と言えようが、そこには、現実社会の批判と歴史理論が含まれる。即ち、サン＝シモンの公式、「あらゆる社会制度は、最も多く、最も貧しい階級の物質的、精神的改善を目的とすべきである」⁽³⁷⁾、と、師の教義を解説するバザールの認識、「人間による人間の搾取、これが、過去における人間関係の状態である。人間と協同した人間による自然の開発、かかるものが未来の提供する画像である」⁽³⁸⁾、と。

自己の新聞をサン＝シモン派機関誌にすることによって（『地球』紙のアンファンタンへの売却〔1831〕）、ルルーの関心は、社会改革の方へ一挙に顕在化していく。そこで採用される方法的理論は、サン＝シモンのフィルターを通した、コンドルセ Condorcet の「進歩」(progrès continu) と「完

(35) ジョルジュ・ルフラン『現代ヨーロッパ社会思想史(上)』(1966)、花崎泉平訳、社会思想社、1976、p. 66。

(36) エヴァンス、p. 118。サンドの実生活上の遍歴は、『オラース』Horace (1841) に反映されている。主人公の、政治結社入党、カルボナリの残党との出会い、サン＝シモン主義の洗礼、『未来』、『百科評論』誌の講読、等々。

(37) シャルレッティ、前掲書 p. 58。

(38) デュルケーム『社会主義およびサン＝シモン』(1928)、森博訳、恒星社厚生閣、1977、p. 246における引用。又、「バザールをもって、(サン＝シモニズムの) 体系はその最大限の論理的整合性を獲得した」(同、p. 243)。

全化」(perfectibilité de l'espèce humaine)の理論だったのである。⁽³⁹⁾ 彼が、1833年に、18世紀の新旧論争を論じるのは(『連続性の法則』*De la loi de continuité*)、完全化へ向けて進歩する人類を顕彰するためである。が、結局、サン＝シモニスムは宗教へ向う。「宗教はできるだけ早く、極貧者の階級の運命を改善するという偉大な目標にむかって、社会を導かなければならない」(『新キリスト教』⁽⁴⁰⁾)。バザールは、師の教説を敷衍して、あらゆる社会秩序の基礎に神の観念を置く。デュルケームの講義は言う。「バザールによれば、人類はより完全な調和と平和の状態に向う傾向があるので、また他方で、社会的調和はその基礎である宗教と同様に発展するので、集合的組織はより調和的になるにつれて、よりいっそう宗教的性格を帯びてき、それゆえ社会はますます宗教的になる」(前掲書 p. 261)。したがって、『すべての政治的秩序は、とりわけ、宗教的秩序である』(同, p. 264における引用)。この神政的思考は、ルルーの国家宗教の観念に反響している。が、宗教の根底にある不変の部分⁽⁴¹⁾を、宗教を越えた「ユマニテ」HUMANITE とすることによって、ルルーは、各宗派、宗教と個人の対立を回避することができる。とにかく、1831年以降、アンファンタンのサン＝シモン教会から離反し、『独立評論』誌に拠った人々は、ルルーを始め、より良き社会実現への熱と、「教化的宗教性」《*religiosité prédicante*》を保持したのである。その意味では、師サン＝シモンの教義を建設的に発展させ乗り越えていったのは、アンファンタンと共に没落したサン＝シモン

(39) サン＝シモンは、「歴史過程には、絶えず反覆される組織的・批判的段階 *les phases organiques et critiques* の交代の法則が存在すると主張し」、自己の提唱する産業主義を位置づけるのである。J. P. メイヤー、『フランスの政治思想』(1949)、五十嵐豊作訳、岩波書店、1956、pp. 78～79。

(40) メイヤーによる引用。前掲書 p. 82。

(41) *D'une religion nationale ou du culte*, Boussac, 1846. 彼は信教の自由の原則が国家をセクトへの分裂に導くものと断じ、宗教が国家に属することを願った18世紀思想家に言及している (p. 131)。

(42) ベニシュエ、前掲書「批評的時代の再評価」の項 (pp. 330～337)。

教会ではなく、離反者の側であったと言えるのかもしれない（『サン＝シモンのすぐれた着想を最も忠実に引きつぎ、最も熱心に発展させた人物、それは、ピエール・ルルーだ』⁽⁴³⁾）。ルルーは、しかし、知識や産業のエリートに指導される社会を構想したサン＝シモンと弟子達とは異なり、ブルジョワジーの特権は認めない。彼は共和主義者でありデモクラットであり社会主義者である。「最も多く、最も貧しい階級」の救済というサン＝シモンの要請に対するルルーの答えは、代議制政治による統治である（「代議制政府が、我々の意見では、進歩の恒常的且つ必然的道具であり、又、未来の社会の完全化されうる、が、不滅の形態なのである」⁽⁴⁴⁾）。

ルルーが同時代の進歩的女性、ジョルジュ・サンド、フロラ・トリスタン Flora Tristan, オルタンス・アラール・ド・メリタンス Hortense Allart de Méritens, ダニエル・ステルヌ Daniel Sterne ことマリー・ダグー Marie d'Agoult に及ぼした感化の源は、これもサン＝シモニズムから受けついだ、人類の理想とフェミニズムであつたに違いない。批判の時代と組織の時代というサン＝シモンの二元説、あるいは、司祭を頂点に戴くような宗教的秩序よりも、ルルーの永遠に進歩する人類の姿の明快さがよりアピールしたのではあるまいか。

社会主義 フランスに社会主義理論が形成されていくのは、19世紀前半、特に、7月王政下である。サン＝シモン、フーリエ Fourier, ブルードン, ルイ・ブラン, カベ, ペクール Pecqueur…。これら、いわゆる社会主義者だけではない。かつて憎まれ抑えられていたものの復権をめざすロマン派の作家達は、皆、社会主義思想を内包していると言える。劣悪なものにも聖性を与えようと願う精神が、産業革命の進行でますます露になってくるプロレタリアートの問題に無関心でいられるわけがない。社会主義者達

(43) Georges Brunet, エヴァンス, p. 190 の注。

(44) エヴァンス, p. 79 における引用。

(45) 「婦人は男子の隷属物であり、男子の所有物であることを止めなければならぬ」（『教義の解明』）。ガローディ, p. 193 における引用。

が、精神において、ロマン派的であったのと同様、ロマン派は、又、社会主義思想家だった。文学的色彩の濃かったルルーの『地球』紙がサン＝シモニズムの機関紙へ移行したのは、確かに、フランス・ロマン主義が社会主義へ進展する様を映し出しているものととらえることはできる。

ピエール・ルルーは、人民主権を唱える点では、ルソーの後継者であったが、しかし、契約理論は受け入れない。社会を「神秘的な一体」*un corps mystique* と看做すからである。彼によれば、ライプニッツのモナドを想起させるが、「人間一人一人は、社会全体の反映であり、自己の世紀、人民、世代の、何らかの形による表明であり、又、各人は人類全体 *l'humanité* であり、一個の主権 *une souveraineté* であり、一個の権利である…⁽⁴⁶⁾」。たとえ、彼が、「現在おこなわれているブルジョワジーとプロレタリアとの闘争は、労働要具を持たない階級とそれを持っている階級との闘争である⁽⁴⁷⁾」、と言っても、それは、政治経済の場における具体的な解決を迫るものではなく、例の *SOLIDARITE* や *HUMANITE* の中に解消されてゆくものである。とは言え、彼は、プロレタリアの問題を告発することはやめない。『金権政治論⁽⁴⁸⁾』においては、ランビュトー *Rumbuteau* の、フランスにおけるプロレタリアートの存在を否認する報告（フランスにいるのはプロレタリア *prolétaire* でなく、土地所有者 *propriétaire* だ）の基となった地租統計を検討し、その虚偽を暴いて、逆に、プロレタリアの存在を証明してみせる。そして、政治的権利 *droit politique* と経済的権利 *droit économique* を奪われた、フランスの3,500万住民中の3,400万人のために、議会の改革 *réforme parlementaire*、もしくは、憲法改革 *réforme constituante* が必要であると訴える（同書、p. 134）。フランス革命と全人類 *toute l'Humanité* の遺産である、自由・平等・博愛、一言で言って、人民

(46) *Cours d'économie politique*, in *Revue encyclopédique* (1833年10月号)。エヴァンス、p. 70 における引用。

(47) *Ibid*, ガローディ、p. 196 における引用。

(48) *De la Ploutocratie, ou du gouvernement des riches*, Boussac, 1848. 最初は、*Revue Indépendante* (1842年9-10月) に発表された。

主権がないがしろにされていることを彼は告発するのである (p. 145)。が、これらのテキストでわかるように、彼の社会経済組織の批判は、改良主義的に留まっていて、決して革命的なものではない。

又、『マルサスと経済学者』⁽⁴⁹⁾には、サン＝シモン批判から始まる資本主義の批判がある。即ちサン＝シモンの産業主義は封建主義とはもはやいかなる関係も持たない新時代のはずだった。「彼は、銀行家や資本家と共に、我々は永久に封建制を脱出したと信じた。しかるに、我々の意見では、我々がかつて同様、封建制に沈んでいる。ただ主人を変えただけで」(同書, p. 62)。所有のカスト *castes de propriété* が出来あがり、新しい産業封建制が生じているのである。増大する富を手中にする一握りの人々、と、生産された富を購買しえない困窮した大衆。ところで、経済学者には、この事態を解決する能力はない。彼らは、「人間の権利」 *droits de l'homme* よりも資本家の繁栄に心をくんでいるのだから (p. 220)。ここで、彼は、「自然の循環」 *Circulus de la Nature* に解決を求める。彼によれば、生産と消費の循環を律するのは大自然であって経済法則ではない。人間は何物も生み出さないし、何物も無化しない。ただ、変形に与るだけである。人間が摂取した食物 (=消費) は、糞尿となり、それが大地を肥沃にして、人間の生存に必要な食物を生み出す (=生産)。資本 *capital*、即ち、富の流通 *circulation des richesses* から飢えが生じるのだとしたら、自然の循環の原理に立ち戻れば良いのである。「マルサスに答えるためには、人間の排泄物で十分だ、と言わねばならない」(p. 217)。経済学者達が言う富(資本)と、ルルーの言う富(生物としての人間そのもの)は全く異質なものであり、結局、ルルーの社会主義思想は、滑稽とも荒唐無稽とも言える、経済学とは無縁な非科学的処方結論を見出したのである。イザンベール *Isambert* は、困惑気味に言っている。「彼は気質からして哲学者であり、経済学は、彼の抽象的精神には向いていない」(エヴァンス, p. 83)。

(49) *Malthus et les économistes*, Boussac, 1848. 1845年から46年にかけて *Revue sociale* に発表された論文をまとめたものである。

Ⅲ 政治家ルルー

ルルーは、1848年6月、立憲議会の議員に選出される。彼が活字によって訴えてきた政治信条を実行に移す機会が到来したのである。

これまでの彼の言論活動は、とりわけ、ロマン派の作家達に影響を与えたのであるし、サン＝シモンの後継者のリーダー格とも、民主主義的共和主義的社会主義の一派の旗手とも見られていた。この時期、彼の評価は、フランスのみにとどまらず、国外でも高かった。イギリスでは、「当代の最も深遠な思想家の一人、…同時に、謙虚な人物でもあり、実践的哲学者でもあって、多くの文学者の心を動かした顯職や富裕な身分よりも、高貴な独立不羈の清貧を好み」、「古代人達の聖なる意味における賢者である」(Véricour, *Modern French Literature*, 1842), と紹介され、ドイツにおいても、彼は、しばしば、言及されている。「現在、フランス哲学界の先頭にいる男」(Rosenkranz, 1843)。パリ滞在中の詩人ハイネ Heine も又ルルーを紹介している。そして、1848年ボストンで刊行されたヴェリクールの教科書版でも、依然、彼の評価は高い。⁽⁵⁰⁾

議会発言 ルルーが初めて立憲議会の演壇に立ったのは6月15日、アルジェリア併合問題の討議に際してだった。ダニエル・ステルヌが語るところによれば、⁽⁵¹⁾彼は、同僚議員達に奇妙な印象を与えていたようだが（快楽主義者と田舎者風が入りまじった現代の使徒風な外観、現下の出来事より過去の文明の豊富な知識）、彼の会話は、最も手強い政敵までをも魅了していた。いづれにせよ、ルルーが、「社会主義の最も知られた使徒の一人」であることは周知のことであり、議場は、議題であるアルジェリア植民地化の問題よりも、国立作業場 *ateliers nationaux* や、貧困 *paupérisme* や、社会革命 *révolution sociale* に対する彼の意見表明を期待している。彼は、

(50) エヴァンス、pp. 44～48. 国外でのルルーの評価がまとめられている。

(51) Daniel Stern, *Histoire de la révolution de 1848*, Balland, 1985 (再刊), pp. 593～596.

工場主を破産させることなく職工達を満足させる方法を開陳するのか。資本と労働を和解させる秘密を彼は握っているのか。対立する利害を取りなしてできるのか。

彼の演説の概略は次の通りである。フランスは植民地開発と移民を必要としている。フランスには共和主義的コミューヌ *communes républicques* が必要であり、新しい文明 *civilisation nouvelle* を求める人民は国外へ飛翔させてやるべきだから（植民地を推奨する社会主義者！）。さらに、彼は言う。「もし、あなた達が、古い経済学から脱却しやうとしないなら、もし、あなた達が、最新の革命（2月革命）のみならず、偉大なフランス革命のあらゆる時期になされた約束すべてを、絶対、反古にするというのであれば、もし、キリスト教そのものが新しい一步を踏み出すことを、あなた達が望まないのであれば、もし、あなた達が、人類の協同 *association humaine* を望まないのであれば、あなた達は、これまでの文明 *civilisation ancienne* を恐しい臨終のうちに死なせることになるのです」。次いで、彼は、フランス社会の貧困を語り⁽⁵²⁾、「暴力、脅し、流血、古くさい誤った馬鹿げた経済学」以外の方策を持たない政府を攻撃し、新しい解決としてのソシアリズムを提起する。社会主義によって人類を生きさせよ。人民に、社会主義的解決を試みさせよ。「なぜなら、彼らにはその権利がある。なぜなら、彼らは現在を破壊することを望まないで、現在を未来と一致させようと願い、近い将来、共和国を実現しようと願っているのだから」。ステルヌ自身さえ言っているように、共和主義の行きすぎが問題になっている議会でのこの発言は、勇気あるものとは言え、ずい分、奇妙なものであったろう。それよりも、一層、不可解なのは、ほぼ一週間後（21日）には国立作業場が閉鎖になり、暴動、苛酷な弾圧へと連なる不穏な社会情勢にあって、ルルーが、農業的協同 *association agricole* と移民政

(52) ルルーは、『金権政治論』（1842, 1848）で用いた統計をくり返すのだが、p. 594 の注を見れば、ルルーに傾倒したステルヌ自身は、少くとも執筆時点（1850）では、この書物を読んでいないことがわかる。

策 colonisation 以外、内乱の危機回避へのいかなる具体策も呈示し得ず、議会よりもむしろ宗教会議にふさわしい（《ce discours si inattendu, qui semblait adressé à un concile plutôt qu' à une assemblée politique…》 p. 595）熱弁をふるう姿である。

批判 ラカサーニュの年譜では、ルルーは、48年5月17日、ナントイユ Nanteuil で逮捕され24日に釈放されるのであるから、議会をおびやかした、社会主義者、労働者のデモ騒動（5月15日事件）に加担していたはずなのだが、時局の重大さはまるで認識できていなかったようである。ステルヌも困惑気味に書いている。「人は、哲学者の抱懐する思想の地平を靄のヴェールを通してしか垣間見なかった」。要するに、聴衆は、ルルーが何を言いたいのか、見当がつかなかった、ということだ。

彼は、さらに、議会に憲法草案を提出することになるが、刊行された同草案の補遺で、人民の代表が政治のプロに手厳しく非難される悲しみを述べている。⁽⁵³⁾ 王政主義者とブルジョワ共和派が絶対多数の議会では、ルルーもその一角を占める山岳派議員の演説が野次と嘲弄で迎えられるのは常であったこと⁽⁵⁵⁾を思えば、ステルヌの記述はかなりルルーをひいきしてある、とは言える。

ところで、ルルーは、ステルヌの描写で想像されるように、ただ、恥をかくために、議会の演壇に立っていたのだろうか。断片的で主観のまじった彼女の描写だけでは政治家ルルーの客観的姿はとらえられないかもしれない。

ブルードンのルイ・ブラン批判を見れば、ルルーが議会で完全に権威を

(53) *Projet d'une constitution démocratique et sociale, fondée sur la loi même de la vie, et donnant, par une organisation véritable de l'Etat, la possibilité de détruire à jamais la Monarchie, l'Aristocratie, l'Anarchie, et le moyen infaillible d'organiser le Travail National sans blesser la liberté. Présenté à l'Assemblée Nationale par un de ses membres, le citoyen P. Leroux.* Sandré, 1848. エヴァンス, p. 249 による。

(54) 議席総数851のうち、元来の共和派285, そのうち230までは穏健派であり、急進派もしくは社会主義者は55議席にすぎない。Agulhon, 前掲書, p. 27.

(55) *Actes et paroles* におけるユゴーの証言。エヴァンス, p. 48.

失墜したわけではないとも思われる。プルー ドンによると、人間社会にはイエラルシーからアナルシーへの絶えざる進歩がある(ルルーと対照的な、サン＝シモン思想のもう一つの帰結)。「ルイ・ブランやルルーはそれと反対のことを主張する。かれらは社会主義者という肩書のほかに、政治家という肩書を固持する。かれらは統治や権威に関する人間であり、国事にかかわる人間なのだ」(『人民の声』, 1849年12月3日⁽⁵⁶⁾)。あるいは、「こうしてルイ・ブランとピエール・ルルーが、国家一公的力の外的構成一の擁護者を自任する時、云々⁽⁵⁷⁾。少なくとも、同じ左翼の陣営からは、ルルーが真面目な批判の対象となっていることがわかる。無視しておいてよい空論家とはみなされていないわけである。あるいは、彼ら社会主義者にとっては、議会の発言は物の数ではなく、核となる思想そのものが重要だということかもしれない。プルー ドンも議会では全く耳を傾けてもらってはいないのである。

とにかく、ルイ・ブランが国立作業場を設立することによって、ある程度、自己の理論を実践したのに比べれば、政治家としてのルルーは自己の理論を何ら具体的行動で示し得なかったと言える。議員前の思想家・哲学者としての名声と政治家としての無能の落差は大きい。「ブルジョワ階級、所有者階級。これこそが敵だ」(『La classe bourgeoise, la classe propriétaire, voilà l'ennemi!』(『百科評論』1832年8月号)と、早くから語った社会主義者が2月革命後に示した姿は失望を招くものでしかなかった。1830年から48年にかけての栄光の後、ルルーの人と作品は以後、むしろ、中傷的になるのである⁽⁵⁸⁾。

結 び

現在までのところ、日本におけるルルー紹介は、はっきり言って、非常に不正確である。それは、紹介者達が参照したフランス語の出典そのもの

(56) 『プルー ドン』(世界の思想家13), 河野健二編, 平凡社, 1977, pp. 63~64.

(57) Ibid, p. 195.

(58) エヴァンス, p. 51.

に問題があるのであって、結局、フランス本国でもルルーへの関心は高くなかったと言えそうである。彼は、サン＝シモニヤンとして、あるいは、空想的社会主義者として、あるいは、ロマン派の、あるいは、フェミニストの理論的指導者として、あるいは人道主義者として、要するに、一つの傾向を形成する群像の中の脇を固める一人物としての扱いしか受けてこなかったという印象が強い。そして、この扱いは正当なことであるかもしれない。というのは、ルルーは、彼独自の理論を体系的に構築していったというより、様々な思想を、ジャーナリズムを通じて社会に普及させていった啓蒙家という風に見えるから。

大革命の挫折によって不幸が増大した階層に属するルルーが、王政あるいはブルジョワ産業社会を拒絶するのは当然であって、困窮の青少年期にすでに社会制度批判、大革命への回帰思想は胚胎していたと言えるであろう。社会改革の思想をすべて受け入れ消化し、彼と同じ運命にある人々（「最も貧しい最も多数の階層」）に伝播し教育していくことは彼の自然の使命であった。弱者の側に立って社会正義を求めた理想主義者達、ロマン派作家達、女権拡張主義者達との接点がここに生じる。彼らは、大革命が与えた自由、平等、博愛の精神を源流にしているのである。が、彼らは、この大革命をも一つの段階とする更に高次の秩序を考える。更新されたキリスト教！宗教を語るのは、フリー・メーソンだけではないし、ラムネーだけでもないし、サン＝シモンだけでもない。王政に反抗し、より良き社会を目ざす人々には、モーゼよりも、イエス・キリストよりも、ルターよりも偉大な人民という観念があまねく広まっていたのである。人々の精神を真の神に結びつけることによっていわば宗教革命が達成され、その結果として、政治革命、社会革命が可能になる。⁽⁵⁹⁾『百科評論』誌に集まった、ルルー、カルノーを総帥とする反アンファンタングループの思想もそういうもので

(59) *Figaro magazine*, 1986年12月6日号の特集記事『予言的秘密の魂に貫ぬかれたあの奇妙な19世紀』(pp. 35~43) は、2月革命前の「革命的キリスト教」の貴重な情報を与えてくれる。

あった。⁽⁶⁰⁾ 芸術、科学、経済、政治、人間社会のあらゆる分野で新しい総合が求められていたのである。

ルルーの作品は確かに、永久的進歩 *progrès continu*, 人間の完全化 *perfectibilité*, 人と人、人と社会、人と神との連帯 *solidarité*, 個々の宗派を越える人類 *Humanité*, といった主要概念に収斂していく (*circulus* は言うまい)。が、くり返せば、これは、ルルーの思想に固有のものと言うより、程度とニュアンスの差はあれ、当時の進歩思想にくり返し現われる合言葉のようなものである。が、これらの思想は具体的方策を欠くが故に現実の矛盾の激化には対応できない。王政は倒され2月革命は達成されても、クーデタから帝政への歴史の流れをくいとめる力を持たない。彼らの思想のユートピア性が暴露されるだけなのである。

かくして、ルルーの生涯と作品は時代によって深く条件づけられている。が、彼個人にもっと密着すれば、別の相貌も見えてくるはずである。貧困に苦しんだ彼は、好意的な評者が言うように、貧困にもかかわらず、清貧に甘んじて、精力的に言論活動を行ったのか。それとも、貧困故に片っぱしから原稿を書かねばならなかったのか（彼は出版活動以外収入の道はなかったはずだ）。彼の書物は、ほとんどすべて、雑誌・新聞に発表されたものを再録ないし加筆したものである。エヴァンスも言うように、雑誌の論文を一つ一つ読む作業がルルーの思想を理解する上で不可欠となる所以である。さて、それでは、彼が書いた類の啓蒙的な書物は売れたのか。彼の出版物の売れ具合の統計はないが売れた形跡はある。参考のために書けば、ラムネーの『一信者の言葉』*Paroles d'un croyant* (1834) は、発売2, 3週間にして数千部売れている。⁽⁶¹⁾ ルイブランの『労働の組織』*L'organisation du travail* (1839) は数日で千部を売りつくし、10年間に10版をかさねた。⁽⁶²⁾ カペーの『イカリア旅行記』*Voyage en Icarie* (1838) は、1840年から

(60) ベニシュール, p. 331 以下の引用を参照のこと。

(61) メイヤー, p. 54.

(62) ガローディー, p. 216

1848年にかけて5版出版され、機関誌『ル・ポピュレール』*Le populaire* (1833年創刊)は、第8巻以後、2万7千部刷られていた。⁽⁶³⁾ルルーの全集の宣伝文句にも、こんな安い値段で本が売られたためしはない。16頁で10センチメートル。1巻700頁で4フラン。値段の割には活字も良いし、紙質も良い、云々。とうたって（高邁な思想を盛りこんだわりには下品な広告）、売れ行きを期待している。⁽⁶⁴⁾亡命から帰国した後アンファンタンに書いた手紙は、売文稼業の手の内を見せてくれている感じがある。⁽⁶⁵⁾ルルーは、時代と同時に貧困によっても、又、色々な意味で条件づけられている。彼には、金を稼ぐ必要上、思想を熟考し練り上げ体系化する余裕がなく、ジャーナリズムに、断片的、概説的にしか発表できなかった。そのうち売れそうな記事が本にまとめられた。断言はできないがそう言えそうである。それは、彼の思想の優劣とは別問題だし、この方法は彼の思想がより広く大衆に浸透する効果を持ったかもしれないのである。

とにかく、ルルーと時代を俯瞰する時、そこには、あらゆるセクトを2月革命、第2帝政へ引きずっていく時代の精神のようなものが見えてくる。その大きなうねりの中に、ルルー自身も又、埋没するかのようである。ルルー個人の矛盾の相は稿を改めて検討することにしたい。（1987年3月）

(63) Ibid. p. 255

(64) *Oeuvres*, pp. 2~3, Prospectus.

(65) エヴァンス、前掲書。Appendice, pp. 209~211.